紀尾井だより

3/4 March / April 2022 [Vol.152]

インタビュー
エベーヌ弦楽四重奏団

2022年度前期
邦楽主催公演 ラインナップ

連載
邦楽名曲解体新書 私のおすすめこの一曲
鼓曲『島の千歳』

Special
トレヴァー・ピノック

紀尾井町音楽散歩 最終回
尾張よければ全て吉

紀尾井ホール

© Julien Mignot

ARTIST Interview

エベーヌ弦楽四重奏団

話題の弦楽四重奏団を毎年ご紹介するコンサート・シリーズ「クァルテットの饗宴」。今年は、ARDミュンヘン国際音楽コンクールの覇者にして、2019年の来日ベストコンサート21(『音楽の友』誌)で、室内楽演奏の最高位にランキングされたエベーヌ弦楽四重奏団と、3年前の紀尾井ホール初登場の際に、千変万化な驚きの表現で好演を博したドーリック弦楽四重奏団の2団体をお届けします。

今回ご紹介するエベーヌ弦楽四重奏団は、≪CLASSICプログラム≫と≪CLASSIC＋JAZZプログラム≫と題して2日間の公演を開催いたします。6月の来日公演に先立ち、エベーヌ弦楽四重奏団の皆さんからお話をお伺いしました。

――2019年4月から2020年1月まで、まさにコロナで世界が閉じる直前までベートーヴェンのワールド・ツアーをなさっていました。この1年近くのツアーを経て、皆さんのベートーヴェン作品への理解と演奏はどのように変化しましたか？

また、コロナ禍は皆さんの音楽生活や音楽的ヴィジョンに何か変化をもたらしましたか？

私たちはベートーヴェンの音楽の普遍的な力に驚かされました！ それぞれの文化によって反応は異なりますが、ベートーヴェンは誰にでも語りかける音楽を創り出すことに明らかに成功しています。それはなにより一過性とリズムの、驚くべき化学反応があるからです。彼の音楽は歌うだけでなく語るのです。

コロナ禍は私たちの職業全体にとり厳しい時期でしたが、良いこともありました。大変ではあるけれど、毎日美しさに触れることができるこの仕事をすることがいかに特権的なことであるかということをより強く感じます。そして、この美しさをリアルに人々と共有できることは、デジタルやライブストリーミングなどには絶対に代えられないものです。

――結成から20年以上活動されていますが、クァルテットを続けていくことで最も大切にしていることは何ですか？

© Julien Mignot

コロナ禍の日々の活動で、私たち4人の間のバランスを取り戻す必要があります。持続可能なキャリアのための最も重要なツールは、音楽と生活の両面で互いに耳を傾けること、個性を補い合うこと、そして頑固であることです！

――ところで、通常リハーサルはどのように進められるのでしょうか？

まず、優先順位を明確にするための話し合いから始めます。緊急事態が発生する可能性もあります。その場合はすぐに要点に取り掛かります。もし時間を掛けてゆっくり練習できる場合は、より純度を求めてビブラートなしのロングイントネーションでの練習を行います。

――作品を作り上げていく上で、メンバーそれぞれの「役どころ」というのはありますか？

特に「役どころ」はありませんが、それぞれの個性が異なる何かをもたらし、異なる働きを要求するのです。多くの場合、誰かを満足させようと試みることでグループ全体が良くなり、そうしているうちに一人一人のヴィジョンが広がります。

――そもそもなぜ皆さんは学生時代にジャズを学んだのですか。そして1999年に「distraction」として始まったエベーヌのジャズが、なぜクァルテットの重要なレパートリーとして定着したのでしょうか。

とても自然なことです。最初のリハーサルの時からクラシック音楽のレパートリーのハードワークと即興演奏が混ざっていました。私たちはいつも即興のファンタジーのためのスペースを残しています。それだけではありません。私たちはとてもよく歌いますし、ヴィオラにマリーが来てからはなおさらです。楽譜に書かれた音楽を演奏するミュージシャンとジャム・セッションに参加するミュージシャンの間の双方向性は実際とてもよく似ていて、少なくとも、成長するために最も重要なスキルである互いを聴く能力を大いに強化します。

――今回の日本公演の2つのプログラムについて、聴きどころを教えてください。

これは言うのが難しいです！ 弦楽四重奏のレパートリーは本当に名作ばかりで、モーツァルトのト長調とショスタコーヴィチの8番で何が一番美しいとは言えません。私たちが強く信じることは、コンサートは様々な異なる雰囲気を行き来する冒険のようであるべきということです。

あたかも偉大な個性のアッサンブラージュのように、ヤナーチェクはドラマチックに、優しさにあふれたシューマン、ハイドンからヤナーチェク、シューマンへの全体構成は、「愛のフィーリング」が音楽にどのように取り入れられるかに焦点をあてて美学の虹を提示します。私たちのジャズ・セッションにハイライトがあるかどうかを言うことは不可能です。それこそがインプロそのもの、予測不可能なのです！

――皆さんにとっては初となる紀尾井ホールを気に入っていただけると嬉しいです。

私たちもとても楽しみにしています。敬意や組織、詩的センスはフランス文化に非常に欠けていると信じており、学ぶべきことがとても多い日本を愛しています。

クァルテットの饗宴 2022

エベーヌ弦楽四重奏団

[CLASSICプログラム]

ハイドン	弦楽四重奏曲第34番ニ長調 op.20-4, Hob.III-34
ヤナーチェク	弦楽四重奏曲第1番《クロイツェル・ソナタ》
シューマン	弦楽四重奏曲第2番ヘ長調 op.41-2

6/16 木 19:00

[CLASSIC+JAZZプログラム]

モーツァルト	弦楽四重奏曲第14番ト長調 K.387
ショスタコーヴィチ	弦楽四重奏曲第8番ハ短調 op.110
ジャズ選曲集（演奏曲目の詳細は当日発表）	

6/17 金 19:00

共催：（株）メロス・アーツ・マネジメント

※公演開催についての最新情報は紀尾井ホールウェブサイトをご確認ください。

© Julien Mignot

2022年度 前期 邦楽主催公演 ラインナップ

お待たせしました！ 2022年度前半の公演情報をお届けします。
好評のシリーズも魅力的な出演者と演目が満載です。

邦楽探検詞章の謎File.3　長唄「供奴」

4月15日（金）18:30

長唄の歌詞は、ストーリー性よりも当時の流行言葉や、風物、そして江戸っ子らしい洒落を織り交ぜて作られていたため、現代の私たちが聴くと、いったい何の話をしているのかわかりにくいところがありますが、江戸の意識をそのまま残しているとも言えます。同じ日本語なのにわからないままでは勿体ない。今回は、第1回でも楽しませてくれた花柳源九郎が案内人の児玉竜一のお話にも参加して、踊りと詞章の交差をさらに掘り下げます。

和生・勘十郎・玉男三夜「傾城阿波の鳴門 十郎兵衛住家の段」「妹背山婦女庭訓 道行恋苧環」（2020年度振替公演）

5月26日（木）18:30　会場／紀尾井ホール1階

浄瑠璃を語る「太夫」と「三味線」に三人遣いの「人形」が一体となった人形浄瑠璃を、吉田和生、桐竹勘十郎、吉田玉男という豪華な顔ぶれで始まります。本来なら今年が最終3年目だった本シリーズ、延期期間に人間国宝が一人増え、さらに貴重な公演になりました。感染症対策を考慮し、紀尾井ホール（1階）に会場を変更してお届けします。どのような公演になるかご期待ください。当世第一の人形遣い三人が順に主役を務める初回は、吉田和生で2演目。聞き手に葛西聖司を迎えた座談会では、今の思いを存分にお話しいただきましょう。

音楽でつづる文学3　平家物語 ―屋島―（2020年度振替公演）

6月24日（金）18:30

元暦2（1185）年の屋島の戦いでは、那須与一の扇の的討ちが名場面の一つです。波で揺れる小舟上の扇の的を射貫けとの難題。「矢を外したら切腹する」と誓って海に馬を進めた与一ですが、その距離70メートル余りもあります。「南無八幡」と祈って射ると的に大当たり！平家琵琶で聴く平家物語をお楽しみに。謡曲「八島」を元にした地歌「八島」は、源平の戦いの修羅場などを、旅する西行法師が思い描きます。室町初期に始まり、多くの武将・大名に愛好され、福岡県みやま市に唯一伝わる幸若舞では、「扇の的」として伝承されています。今回延期も経て13年ぶりに東京にやってきます。

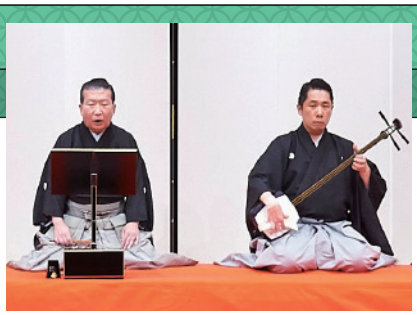
新 紀尾井素踊りの会　第三回吾妻徳穂

7月1日（金）18:30

女性の素踊りは、その作品ごとのエッセンスを濃縮した姿で現す、絵画でいえば水墨画を思わせるような表現方法であり、舞踊家の力量が試されます。女性の曲線を生かした流麗な踊りとして知られる吾妻流。流派復興の祖となり、戦後「アヅマカブキ」で海外公演を行うなど、日本舞踊界に数々の足跡を残した初代吾妻徳穂（1909－1998）の孫で三世宗家の二代目 吾妻徳穂が披露するのは、長唄の二番「島の千歳」と「静と知盛」。「島の千歳」は先代と同じ形で、「静と知盛」は中村富十郎が二代目徳穂の踊りの会のために素踊りにしたものです。思い入れの深い二番組を支えるのは、今藤長一郎と稀音家祐介、梅屋右近ほかによる確かな演奏です。

紀尾井たっぷり名曲5　清元「須磨の写絵」清元志寿雄太夫×清元志寿造

9月10日（土）14:00



文化12（1815）年初演。神戸市須磨区に伝わる「松風村雨伝説」から、公家の在原行平が流罪地の須磨で、海女の松風・村雨姉妹との悲恋を描いた能「松風」を素材にした清元舞踊曲です。行平をめぐる姉妹のやり取りの「上の巻」と、行平が去ったと知った松風が悲嘆に暮れる「下の巻」に分かれており、明治以降は下の巻だけの上演となっていましたが、六世中村歌右衛門が上下通して昭和29年（1954）に復活しました。上下を通しての上演は稀なこの大曲を清元志寿雄太夫と清元志寿造の名演奏で存分にお楽しみください。

※公演開催についての最新情報は紀尾井ホールウェブサイトをご確認ください。

邦楽名曲解体新書

私のおすすめこの一曲

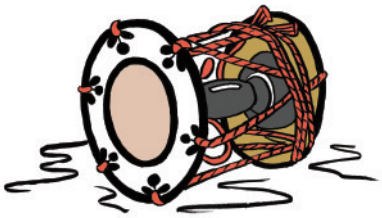
鼓曲『島の千歳』

お話／堅田新十郎さん

囃子方の襲名披露の鼓曲として誕生

『島の千歳』は明治三十八年（一九〇五）、私の曽祖父が七世望月太左衛門を襲名した際の披露曲として作られました。歌詞に丹頂鶴や緑毛の蓑亀（※1）、朝日が昇る海に浮かぶ蓬莱山（※2）などが登場するおめでたい祝言曲です。曲名は白拍子（※3）の祖といわれる「島の千歳」の名前から来ていますが、能の『翁千歳三番叟』（※4）の意をかけて「せんざい」と読むようになったといわれています。

曲の前半は能のお囃子をベースに作られており、途中で能から離れていきます。「四方の敷波…」と歌うところですね。ポポポポポ…と波の調べのように鼓を打つ「波の鼓」という技法が入ります。そして再び能の手が入ってくる。



この曲はたいへん人気で、舞踊の公演や発表会ではよく演奏されています。白拍子姿に憧れる方が多いということもあるのでしょうけれど、演奏時間は十五分弱と長くも短くもなく、緩急もあり、曲としてもよく完成されていると思います。

長唄として紹介されることが多いのですが、本来は鼓をメインとする鼓曲として作られました。作曲は五世杵屋勘五郎。囃子方（笛、小鼓、大鼓、太鼓などの演奏者）が長唄に作曲を依頼するのはかなり珍しいことで、メインが鼓というのは当時斬新な試みだったようです。

今は、この曲が鼓曲だということが忘れられがちで、長唄のように立三味線が引っ張る形で上演されることが多いのですが、本来は鼓がコンダクターとして作られたのだろうと思います。三味線方の杵家弥七さんと舞台でご一緒した時は、そのことを思い起こしましたね。弥七さんは長唄の杵家流の家元でありながら、囃子方の堅田流の名取でもいらっしゃるので、お囃子にも精通されているんです。舞台で弥七さんはほとんど掛け声をかけてくださらない。こちらが鼓を打つとそれに合わせてくださる。鼓の技量を試されているようで、冷や汗をかきましたね。でもこれがこの曲の本来の形なのでしょう。その点、父の堅田喜三久は天才肌で、体全体の動きで舞台を引っ張るという演奏スタイルでした。私はそういう能力を持ち合わせていないのですが、あれくらい全身でアクションすると三味線方も弾きやすいと思います。

舞台に上がる時に心がけていること

後半、「春立つ空の若水は」の後は「合方」という間奏部にあたり、三味線と鼓の掛け合いが聴きどころです。鼓は基本的にずっと打っているのですが、四拍だけ無音部があるんですよ。これはどういう意味があるのだろうと考えてみたのですが、もしかしたら鼓が乾燥しないように息を吹きかけられる瞬間なのかもしれません。当時の作曲者にその意図を聴いてみないとわかりませんけどね（笑）。鼓はデリケートな楽器で、湿度などの環境が音に大きく影響します。冬は乾燥するのでいやですね。空調にもかなり左右されます。様々な演奏会場に行くので、現場の環境を見て、それに合った皮に取り替えたりもしますよ。

この曲は基本的に、お囃子は小鼓のみ。自由度が高く昔は録音技術がなかったので、演奏者によってどんどん手組が枝分かれしてしまったのですが、私は父の手組を変えないように心がけています。父も、手組を変えることを嫌っていました。お客様にとっても演奏家にとっても効果的なら変えてもいいと思うのですが、ほとんどわからないような変更なら、しない方がいい。特に大鼓や太鼓、笛が入る四拍子でできた曲は異なる流派と一緒に演奏する時に「この曲はこの手組でよろしいでしょうか」と毎回打ち合わせするのは大変ですからね。そこに神経を使うよりは、演奏そのものの質を高めることに集中したいと思っています。

取材・文・イラスト／尾花 知美
（月刊『江戸楽』編集部）

【脚注】
※1 甲羅に緑の毛がついた亀で、吉兆の証しとして珍重されてきた
※2 仙人が住むという中国の伝説の島。不老不死の地
※3 平安末期から鎌倉時代にかけて流行した歌舞。また、それを演じる遊女を指した
※4 能の演目の一つで祝言曲として上演される『翁』のこと。千歳舞・翁舞・三番叟舞の三種の舞の順番で構成される

堅田 新十郎
昭和四十二年東京都生まれ。平成二年明治大学卒業、父・三代目堅田喜三久（人間国宝）のもと、堅田宏として演奏活動を開始。平成十年四代目堅田新十郎を襲名。現在、囃子方として歌舞伎舞台、NHK「いろはに邦楽」等のTV・ラジオ出演、CD発表のほか、海外でも演奏活動を行う。長唄協会会員、桐朋学園芸術短期大学講師。

豊かな感受性と気品

KCOに新たな地平をもたらすピノックとの船出

トレヴァー・ピノック

20世紀後半から現在に至る演奏解釈として決して無視できない潮流は、ピリオド楽器による演奏であろう。ある作品を演奏する際にその時代の楽器や演奏方法などを可能な限り援用するという発想は、背景に想定される作曲家の本来の意図や歴史的コンテクストの探究という理想もさることながら、新たな演奏解釈の地平を切り開くという意味でインパクトがあった。欧米におけるこの潮流の中心地であり続けているのが英国であり、半世紀に亘って同国のピリオド楽器演奏を主導してきたリーダーの一人がトレヴァー・ピノックである。いわばピリオド楽器演奏史を体現する音楽家が紀尾井ホール室内管弦楽団（KCO）の第3代首席指揮者に就任することの意義は、その意味で非常に大きい。

ピノックのリーダーとしての本格的な歩みは1973年、27歳の年にピリオド楽器による「イングリッシュ・コンサート」を設立した時にまで遡る。元来はチェンバロ奏者であり、ソリストとしての活動を継続させながら、このイングリッシュ・コンサートを世界に冠たる団体へと押し上げていった。その成果はアルヒーフ・レーベルへの数多の録音でも示されている。ピリオド楽器のリーダーの常として、彼のレパートリーの中核を占めるのがバロックから古典派にかけての作品で、それらにおいて示されたピノックの解釈は、ウィーン・フィルやベルリン・フィルなどを含むモダン楽器の管弦楽団、あるいはオペラハウスも興味を示した。2003年、結成30年を機にイングリッシュ・コンサートの指揮をヴァイオリン奏者のアンドルー・マンゼに譲ったのも、客演指揮の機会が増えたことが背景にあったのかも知れない。彼がKCOの指揮台に初めて上がったのもその直後、2004年である。

その時にも披露されたW・A・モーツァルトの音楽がこの度の首席指揮者就任披露の意味を持つ第130回の定期演奏会でも取り上げられる。若き日のピノックは「チェンバロの貴公子」などと呼ばれたことがあったと記憶しているが、彼のモーツァルト演奏は確かに気品に満ちたものである。しかし、この貴公子は非常に感受性が豊かで、時に感情の激しい吐露なども辞さないのである。筆者はそれを彼の録音や実演で強く感じてきた。

© Gerard Collett

プログラムを飾る3曲のシンフォニーはいずれもトランペット、ティンパニを含み、作曲者としてはいずれも最大級の楽器編成を擁する。例えば第39番変ホ長調K・543の第1楽章は荘厳な行進曲を思わせる冒頭から始まるが、不協和音を孕んだ荒々しさを顕にする場面、ため息の漏れる場面、半音階が神秘的な気分を醸し出す場面などもあり、それらの対比が楽器編成の豊かさによって強調されている。イングリッシュ・コンサートとの録音でも示されているが、ピノックは一つの楽章、部分の中で変幻自在にキャラクターが移り変わるモーツァルトの特徴を的確に読み取り、それを実際の音響で実現してくれるのである。しかし、激しく荒ぶる場面でも気品は失われない。

筆者はこうしたバランス感覚がKCOに新たな地平をもたらしてくれるのではないかと期待している。

文／安田和信
（音楽評論家、桐朋学園大学准教授）

第3代首席指揮者 就任記念コンサート

紀尾井ホール室内管弦楽団 第130回定期演奏会

4/22（金）19:00　4/23（土）14:00

［指揮］トレヴァー・ピノック
［曲目］
モーツァルト 交響曲第31番ニ長調 K.297（300a）《パリ》
モーツァルト 交響曲第35番ニ長調 K.385《ハフナー》
モーツァルト 交響曲第39番変ホ長調 K.543

※公演開催についての最新情報は紀尾井ホールウェブサイトをご確認ください。

第32回 日本製鉄音楽賞 受賞者が決定しました。

将来を期待される優れた演奏家に贈られる**フレッシュアーティスト賞**は、ミュンヘン国際音楽コンクール・チェロ部門において日本人として初優勝し一躍国際的に注目を集めることとなった**佐藤晴真**（さとう はるま）さん（チェロ）に。またクラッシック音楽文化の発展に大きな貢献を果たした方に贈られる**特別賞**には、日本の舞台芸術界を60年にわたり牽引され福岡文化財団主催音楽祭の総監督でもある**広渡 勲**（ひろわたり いさお）さんがそれぞれ受賞されました。佐藤さんは高い水準の演奏で最高の評価を得ており、日本を代表するチェリストになる逸材として大きく期待されています。広瀬さんはこれまで、多岐にわたる海外の著名な芸術家との交流により質の高い公演を作り上げてこられ、わが国の舞台音楽界での功績が高く評価されました。

© ヒダキトモコ

フレッシュアーティスト賞　佐藤晴真（さとう はるま）（チェロ）

特別賞　広渡 勲（ひろわたり いさお）（プロデューサー・演出家）

フォトレポート　最近の公演から

11.2（火）　邦楽探検 詞章の謎 File.2 長唄「越後獅子」

前半は案内人の児玉竜一さんに歌詞や踊りの振りについて解説いただき、後半は実際に西川扇左衛門さんによる「越後獅子」の素踊りと演奏をお楽しみいただきました。

11.5（金）・6（土）　紀尾井ホール室内管弦楽団 第128回定期演奏会

アンケートより

指揮なしの2曲、難曲なのに統率されていて個々の技術の高さ無しにはありえないと感じました。また、アンデルシェフスキさんのモーツァルトは、とても瑞々しくてオケとの親和性もよくて感動しました。ピアノとオケの掛け合いも「同じ言語を話している」のがよくわかりました。

11.17（水）　紀尾井 午後の音楽会 祭 ―供（そな）う―

祭りをテーマに、清元栄吉（三味線）さんと池松宏（コントラバス）さんとの日本民謡によるセッションなど盛りだくさんな内容でお届けしました。
中でも池松さんソロ演奏の「パgani蟹」は斬新で遊び心たっぷりでした（笑）

編集後記

いよいよ2022年度の公演がスタートします。今回は4月にKCO首席指揮者に就任するトレヴァー・ピノック氏についてと公演聴きどころや、6月来日予定のエベーヌ弦楽四重奏団へのインタビュー、邦楽の主催公演ラインナップ発表など情報満載でお届けしました。今春は足を延ばして生演奏をお楽しみいただければ幸いです。コロナ対策も万全にして皆さまのご来場を心よりお待ちしております。

今号の表紙　『**箏と桜**』　［協力］花／hanadouraku　箏／藤本昭子

日本の四季は美しく、なかでも、世界中の旅行客を魅了してやまないのが春、桜の季節です。そして日本ならではの春を感じさせる和楽器といえば箏ではないでしょうか。桜の花びらがひらひらと舞い踊る風景には箏の音が聴こえてきます。

紀尾井ホールにご支援いただいている企業および個人の方々です

紀尾井サポートシステム会員（五十音順・「株式会社」等表記及び敬称略）

《特別協賛会員》 A.ランゲ&ゾーネ／日鉄ソリューションズ／三菱商事／三菱地所

《みやび会員》 伊藤忠商事／大島造船所／KDDI／商船三井／菅原／住友商事／日本郵船／丸紅／三井住友銀行／三井物産／三井不動産／三菱商事／三菱地所／メタルワン　ほか匿名2社

《ひびき会員》 オカムラ／きらぼし銀行／高砂熱学工業／竹中工務店／山下設計

《みどり会員》 青鬼運送／赤坂維新號／赤坂 エクセルホテル東急／今治造船／ヴォートル／エーケーディ／NTTドコモ／荏原冷熱システム／鹿島建設／ザ・キャピトルホテル　東急／三協／清水建設／上智大学／西武プロパティーズ／大成建設／千代田商事／テェイスト・ライフ／東芝ライテック／永田音響設計／ニュー・オータニ／ハウス食品グループ本社／パナソニック／富士フイルムビジネスイノベーションジャパン／三井住友信託銀行／三菱UFJ銀行／三菱UFJ信託銀行／三菱UFJモルガン・スタンレー証券／ミュージション／明治座舞台／ヤマハサウンドシステム／有帆／ワークショップ21

《あおい会員》 青木陽介／淺見 恵／足立友子／石崎智代／磯部治生／井上善雄／植竹浩樹／大垣尚司／太田清史／大武和夫／片山能輔／加藤巻恵／栗山信子／河野紗妃／佐久間庸行／佐部いく子／清水 正／清水多美子／清水康子／白土英明／鈴木 亮／高下謹壱／武上由佳／田中 進／外山雄三／中塚一雄／中西達郎／中村健司／西村剋美／原田清朗／北條哲也／堀川将史／牧本惠美子／松枝 力／松本美恵／簑輪永世／宮原 薫／宮本信幸／陸田 実／村上喜代次／持留宗一郎／八木一夫／八木晶子／山内寿実／吉峯裕毅

ほか匿名26名　計153口　（2022年2月1日現在）

特別支援会員（五十音順・「株式会社」等表記略）

アステック入江／五十鈴／NST日本鉄板／NSユナイテッド海運／NSユナイテッド内航海運／エヌエスリース／エヌテック／王子製鉄／大阪製鐵／九築工業／草野産業／黒崎播磨／合同製鐵／小松シヤリング／山九／産業振興／三晃金属工業／サンユウ／三洋海運／ジオスター／新日本電工／スガテック／大同特殊鋼／大和製罐／高砂鐵工／高田工業所／鶴見鋼管／DNPエリオ／テツゲン／東海鋼材工業／東邦シートフレーム／トピー工業／日亜鋼業／日鉄環境／日鉄ケミカル&マテリアル／日鉄建材／日鉄鋼管／日鉄鉱業／日鉄鋼板／日鉄興和不動産／日鉄ソリューションズ／日鉄テックスエンジ／日鉄ドラム／（旧）日新製鋼／日鉄物産／日鉄物流／日鉄物流君津／日鉄物流八幡／日鉄保険サービス／日鉄ボルテン／日鉄溶接工業／日本金属／日本触媒／濱田重工／富士鉄鋼センター／不動テトラ／幕張テクノガーデン／松菱金属工業／三島光産／宮崎精鋼／吉川工業

日本製鉄　（2020年度、匿名一社除く）

紀尾井だより 3~4月号 2022年(令和4年)3月1日発行[隔月発行・通巻152号] ●企画・編集発行：公益財団法人 日本製鉄文化財団 内田勇人 ●編集・デザイン・印刷：株式会社 エイチ・アンド・アール プロモーション

尾張藩旧中屋敷跡地から旧上屋敷方面を望む。

紀尾井町音楽散歩 [最終回] 尾張よければ全て吉

本連載最終回は、市ケ谷から四谷方面にかけての音楽散歩です。

紀尾井ホールの敷地は、江戸時代に尾張藩の中屋敷であったことは以前にも触れましたが、尾張藩の上屋敷はJR市ケ谷駅の堀を隔てた向かい側の高台、現在の防衛省のところにありました。この旧上屋敷の裏手側に、大正から昭和にかけて住み続けていたのが、箏曲《春の海》で名高い作曲家の宮城道雄(1894-1956)です。宮城はこの地を気に入っていたのか、界隈を5回も転居し続け、最終的に新宿区中町に落ち着きました。終の棲家となったこの場所には、現在、彼の業績を顕彰する宮城道雄記念館が建ち、かつてそこで創作にも使用した和館の書斎も見ることができます。

宮城と共にいくつもの作品を世に出した詩人で作詞家の西條八十(1892-1970)も、旧尾張藩上屋敷からほど近い、新宿区の払方(ほいかた)町で生れました。≪東京行進曲≫≪青い山脈≫といった流行歌や≪東京音頭≫でも知られる西條は、早稲田大学教授や日本音楽著作権協会会長などを務め、文化の振興に尽力します。西條もまた昭和20年頃まで新宿区内を転々としながら暮らします。時代こそ違え、本連載第1回でご紹介したクーデンホフ=カレルギー伯爵一家の住まいと道を隔てた隣地に住んだこともありました。ところで、作家森村誠一が1970年代後半に書いたベストセラー小説で、映画にもなった『人間の証明』は、西條の詩をテーマにして物語が展開します。「母さん 僕のあの帽子、どうしたでしょうね?」というフレーズは当時一世を風靡しました。その帽子のシルエットを連想させる建物として登場するのが、紀尾井ホール向かいのホテルニューオータニだと言われています。西條はこのヒット作品を知ることなく1970年8月に亡くなりますが、その僅か3か月後、当時の人気作家が旧尾張藩上屋敷の跡地で衝撃的な死を遂げます。三島由紀夫(1925-1970)です。

三島は現在の新宿区四谷四丁目に官僚の子として生まれ、45年の生涯で数多くの小説を残しますが、三島文学の中にはいくつものクラシック音楽が登場します。とりわけ彼はワーグナーの楽劇《トリスタンとイゾルデ》に格別の愛着を持っていました。また、作曲家の黛敏郎が、三島の代表作『金閣寺』をオペラ化する際、三島は「俺はオペラといえば新派大悲劇調のイタリア・オペラが好きで・・・」とも語っており、イタリア・オペラにも傾倒していたことが窺われます。『金閣寺』のほか、『午後の曳航』が原作の《裏切られた海》(H.W.ヘンツェ)、《鹿鳴館》(池辺晋一郎)、《斑女》(細川俊夫)など、オペラ化された作品がいくつもあることから、三島は優れたオペラの原作者とも言えるでしょう。こうした彼の創作の原点は、小学生時代の様々な体験が影響を及ぼしていると言われています。彼は紀尾井ホール脇の外堀を隔てた学習院初等科に通っていました。周りの景色は一変していますが、自宅から学校までの道筋は当時とほとんど変わっていません。新宿通りから四谷見附交差点を経て外堀通りの学習院へと向かう道すがら、天才作家の幼少期の面影を偲んでみてはいかがでしょうか。〈K〉

(紀尾井町音楽散歩「完」)

紀尾井友の会 終了のお知らせ

「紀尾井友の会」は、2022年3月末日をもちまして終了いたします。長い間ご愛顧賜りましたことをここに厚くお礼申し上げます。
今後は、紀尾井ホールウェブチケットのメールマガジンを通してお得な情報を発信してまいります。また、紀尾井サポートシステム・あおい会員では、皆さまからの温かいご寄附をお待ちしております。引き続き、日本製鉄文化財団・紀尾井ホールをお引立て賜りますようお願い申し上げます。

公式SNSで最新情報配信中

紀尾井ホール　紀尾井ホール室内管弦楽団

チケットのお申込み

紀尾井ホールウェブチケット https://kioihall.jp/tickets

※紀尾井ホールチケットセンターの電話受付は2021年3月31日をもって終了いたしました。

紀尾井ホール

公益財団法人 日本製鉄文化財団
〒102-0094 東京都千代田区紀尾井町6番5号 TEL.03-5276-4500(代表) FAX.03-5276-4527 https://kioihall.jp